

Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】 赤井誠生教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2018, 44, p. 333-337
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68305
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【定年退職教授の履歴および主要業績】

赤 井 誠 生 教授

あか い せい き
赤 井 誠 生 教授

- 1978年3月 大阪大学文学部哲学科心理学専攻卒業
- 1983年3月 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了
- 1987年3月 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得後退学
- 1987年4月 大阪大学人間科学部文部技官教育職
- 1989年6月 大阪大学人間科学部助手
- 1995年2月 博士（人間科学）（大阪大学）
- 1995年5月 大阪大学人間科学部講師
- 1996年4月 大阪大学人間科学部助教授
- 2000年4月 大阪大学大学院人間科学研究科助教授
- 2004年4月 大阪大学大学教育実践センター教授（大学院人間科学研究科兼任）
- 2012年4月 大阪大学大学院人間科学研究科教授
- 2018年4月 大阪大学名誉教授

赤井誠生教授は1978年3月大阪大学文学部哲学科心理学専攻を卒業し、1983年3月大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程を修了し、さらに1987年3月大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程を単位取得後退学し、1987年4月大阪大学人間科学部文部技官に採用された。1989年6月大阪大学人間科学部助手、1995年5月大阪大学人間科学部講師、1996年4月大阪大学人間科学部助教授、2004年4月大阪大学大学教育実践センター教授を経て、2012年4月に大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学講座基礎心理学分野教授に着任した。大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科及び大阪大学大学教育実践センターの発展に尽力し、2018年3月31日限り定年退職するものである。この間、長年にわたって真摯な態度で学生の教育と研究に従事し、多くの後進の育成に携った。

人間科学研究科在任時には、学内委員として学生生活委員会、既修得単位認定委員会などの委員に任じられ尽力するとともに、部内委員としては論文博士受理検討委員会委員などを務め、人間科学研究科の運営に大きく貢献した。

また、大学教育実践センター在任時には、教育広報部門長、FD推進部門長を歴任した。2006年4月には教育実践研究部長に指名され、大学教育実践センターの執行部の一員として共通教育を主とした大阪大学の教育全般の発展に寄与した。同時期には、全学FD連絡会議委員、大学教育実践センター運営企画会議委員などの学内委員も務め、さらに『創造と実践』や『共通教育だより』などの広報誌の編集委員長として学内の教育広報にも貢献した。

同教授の主な研究領域は動機づけに関する心理学的研究である。中でも内発的動機づけに関してはわが国における数少ない研究者として独自の立場を築いてきた。その研究テーマは多岐にわたるが、以下の4つの領域にまとめられよう。

1. 自発的な視覚的探索に関する実験的研究

内発的動機づけの基礎研究として自発的に凝視する対象について実験的に検討し、精密な変数操作によって対象の持つ曖昧性と複雑性が交互作用を有することを見出している。

2. 内発的動機づけに寄与する目標要因に関する実験的検討

基礎的・知覚的研究からさらに進み、より高次な認知的変数である「目標」を変数として導入し、よりリアルな環境を与えるコンピュータゲームを用いた数多くの実験によって、目標と遂行間のズレと内発的動機づけの間に逆U字の関係が見いだされることを実証した。この研究は、多くの場所において発表がなされ、高い評価を得ている。

3. 内発的動機づけに関する理論・方法論の研究

実験的研究と平行して内発的動機づけおよび動機づけに関する理論的考察を行っている。内発的動機づけ研究における様々なパラダイムの比較検討をおこない、これらを総合した研究の重要性を示唆している。この成果は様々な著作において表現されている。

4. 発達加速現象に関する共同研究

卒業論文作成時より、大阪大学文学部にその端を持つ全国初潮調査に共同研究者として長年関わり、日本における初潮を指標とする性成熟の発達加速現象の低年齢化、発達勾配現象としての国内地域差、さらには日本女性の性成熟の世界的な低年齢を確認してきた。

これらの研究は7冊の著書および数多くの学術雑誌に掲載され、関連分野の研究者から高い評価を得ている。

学会活動では、日本心理学会地域別代議員を長きにわたり務め、日本心理学会の発展に寄与した。また、日本基礎心理学会第16回大会（1997年）や日本心理学会第74回大会（2010年）では準備委員会委員を務め、各大会を成功裏に開催することに尽力した。さらに、京都で開催された第22回国際応用心理学会議（ICAP1990）では組織委員を務め、日本の心理学の国際化にも貢献した。また、放送大学講師、日本海洋レジャー安全振興協会初任講習講師などを務めるなど広く社会的活動も行った。

以上のように、同教授は大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科及び大阪大学大学教育実践センターにおける教育と研究を通じて、その充実と発展に寄与するとともに、動機づけ心理学を中心とした学際的研究によって学術振興に大きく貢献した。

主 要 業 績

著書

1. 赤井誠生 (1988), 「青年期的人格形成と価値観」, 武衛孝雄・嶋田博行編『青年心理学要論 (第5章)』, 杉山書店, pp.57-81.
2. 赤井誠生・荘巖舜哉共編著 (2005), 「感情・動機づけ」, 中島義明・繁樹算男・箱田裕司編『新心理学の基礎知識』, 有斐閣, pp.241-274.
3. 赤井誠生 (2006), 「行動の発達」, 俣野彰三・遠山正爾・塩坂貞夫編『新・行動と脳 (第Ⅲ部 第1章)』, 大阪大学出版会, pp.136-150.
4. 赤井誠生・野村弘平 (2012), 「動機づけ・情動」, 大山 正・中島義明編『実験心理学への招待 [改訂版] (第6章)』, サイエンス社, pp.173-205.

他 3 冊

学術論文

1. 赤井誠生 (1988), 「構造的情報理論による図形の曖昧性の分析 —自発的な視覚的探索との関連より—」, 大阪大学人間科学部紀要, 14, 49-71.
2. 赤井誠生 (1989), 「内発的動機づけ研究における若干の問題について —帰属理論的接近法と認知的的接近法—」, 大阪大学人間科学部紀要, 15, 61-76.
3. Akai, S., & Nakajima, Y. (1989), Effects of information conflict and complexity in visual figures on voluntary visual exploration, using structural information theory. *Perceptual and Motor Skills*, 69, 575-578.
4. 赤井誠生 (1990), 「内発的動機づけ研究とコンピュータ・ゲーム」, 大阪大学人間科学部紀要, 16, 113-131.
5. 赤井誠生 (1996), 「認知的動機づけ諸理論に関する一考察」, 大阪大学人間科学部紀要, 22, 21-34.
6. 赤井誠生・和田一成・堀下智子・新居佳子・松下戦具 (2006), 「大学の授業における興味 —心理学的観点より—」, 大阪大学大学教育実践センター紀要, 2, 31-34.

他 15 報